

研究課題	生食用ケールの試作（夏播き）
背景・ねらい	ケールは青汁の原料として広く知られているが、近年「生食用ケール」が育種され、健康志向の強い欧米などでサラダ食材として人気が高まっているという。国内での需要も高まりつつあることから、特性を把握しておく必要がある。
担当者名	鍋田慎介 三浦雅子 船木武人 小田切文朗
研究期間	2017（単年度）

1 目的

新潟市内での栽培に適した品目か検討する。

2 方法

(1) 供試品種

カーリーケール・ヴェルデ（緑色）、カーリーケール・ロッソ（紫色）/トキタ種苗

(2) 試験区の構成・規模： 1区制 1品種 10株

(3) 耕種概要

ア 播種・定植：8月8日播種（128穴セルトレイ） 8月21日定植

イ 栽植様式：畝幅1m, 株間40cm, 1条植え（2500株/10a）

ウ 施肥：基肥（kg/10a）N-P₂O₅-K₂O=15-10-7.5

追肥 N-P₂O₅-K₂O=5-1.7-1.7

エ 被覆：黒マルチ

オ 誘引：直管（φ19mm）に麻紐で誘引（9月19日）

(4) 調査項目：収穫葉数（枚）、重さ（g） ※収穫の目安は葉長20cm～30cm

3 結果の概要

(1) 栽培経過の概要

9月下旬までの生育は旺盛で、主茎頂点から次々と展葉しながら伸長した。シュート化する腋芽の発生もあり、適宜除去を行う必要があった。株の形状は芽キャベツやプチヴェールに似ており、展葉した葉はやがて40cmを超える長さとなり下垂する。モンシロチョウの飛来も頻繁に見られたが、2週に1回程度の薬剤散布で目立った食害は起こらなかった。9月18日に台風があり、一部倒伏したため、1株ずつ直管を立てて誘引した（番外を利用して支柱をしないものを観察したが、倒伏後しばらくして生長点が起き上がって成長を続けていた）。品種特有の縮緬は暖かい時期は入らず、秋冷が進むと生長点から展葉する葉に徐々に入り始めた。縮緬の発生を確認し10月2日から収穫を開始した。冷え込みが強くなるにつれ展葉が緩やかになり、12月中旬になるとほぼ停止したため、12月15日で収穫を打ち切った。

(2) 生育および収量

栽培終了時（12月15日）の主茎長は両品種とも40cm前後であった。地際から収穫市までの高さは約20cm。地際から収穫開始位置までの葉数は約18枚であった（表1）。また1株あたりの収量は、両品種とも葉数にして約19枚であった。シュートの発生はロッソで多く見られた（達観）。

(3) 食味（生食・加熱調理）

そのまま食べれば少し青臭いが、縮緬がドレッシングに良く合い、パリパリとした歯ごたえを楽しめる。苦味や辛味はなく食べやすい。加熱すると小さくなり、ロッソは赤が抜け濃い緑色になった。品種による味の違いは感じられなかった。

(4) 関東・中部地方におけるケール生産の現状（種苗会社担当者様からの聞き取り）

2017年現在の平均販売額は直売所で1袋（葉3枚入り）100円。スーパーなどでは180円を超す単価で販売されている。しかし1か所で大量に売れるものでないことから、一部大手企業との契約栽培を除いては小規模生産が主である。

(5) 以上のことから、新潟市内における夏播き栽培の収穫期間は10月上旬から12月中旬と思われる。両品種とも1株あたりの収量は約19枚で、作業は比較的楽である。現在のところ高単価で取引されているため、販路が確立されれば有望な品目になりうると思われる。

表1 生育調査（栽培終了時/1株あたり）

	主茎長(cm)	収穫位置までの高さ(cm)	収穫位置までの葉数(枚)
ヴェルデ(緑)	36.9	18.1	18.6
ロッソ(紫)	43.1	22.9	17.9

表2 収量(1株あたり)

旬	ヴェルデ(緑)		ロッソ(紫)	
	枚	g	枚	g
10月上旬	5.6	88.9	6.0	85.4
10月中旬	4.9	91.0	4.2	73.3
10月下旬	4.6	107.3	3.8	77.2
11月上旬	1.9	50.9	2.8	45.1
11月中旬	1.5	41.7	1.8	27.2
11月下旬	0.5	15.8	0.1	1.6
12月上旬	0.4	14.6	0.0	0.0
合計	19.4	410.2	18.7	309.8

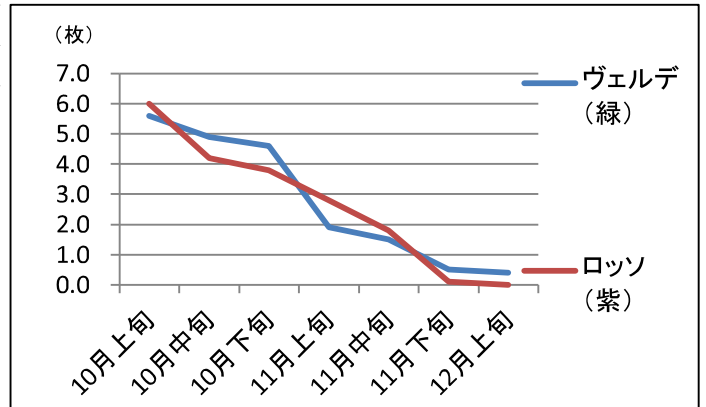


図1 旬別収量(枚)の推移/1株あたり

<ヴェルデ(緑)>



<ロッソ(紫)>



生長点の様子



収穫が進んだ状態



収穫物